

近代京都における鉄道開業と名所変化

—「京都鉄道名勝案内」を中心に—

印 牧 真 明*

I. はじめに

明治中期以降、関東、関西を中心に全国で鉄道が敷設され、交通体系が変化するとともに、観光のあり方も大きく変化した。これまでの主に徒歩による旅行の案内記に代わり、新たに鉄道沿線案内が刊行されるようになったのである。山本¹⁾は日本全体を対象に、旅程に関する案内の道中記が鉄道沿線案内に移り変わっていく経過を述べ、鉄道案内がその後さらに目的地別の案内へと移り変わっていく過程を述べている。そして、荒山は、明治から戦前期までの鉄道沿線案内を中心とする50点あまりの旅行案内を対象に、それらを出版年や出版元、植民地・外国といった場所ごとに整理した図録を作成し、近代期における旅行案内の変遷を明らかにしている²⁾。

しかし、近世から多くの案内記が出版されてきた京都を対象に、鉄道敷設による名所案内の変化を詳細に明らかにした研究はみられない³⁾。そこで本研究では、鉄道沿線案内としては京都で最初期に出版された「京都鉄道名勝案内」(1903(明治36)年)を対象に、

その前後に出版された名所案内記・名所図会類を比較しながら、鉄道敷設による案内への影響を明らかにする。本研究で鉄道及び鉄道会社の案内記に注目する理由は、近世以来これまで取り上げられてきた名所の分布が、新しい交通手段である鉄道の敷設によって大きく変化したと考えられるからである。加えて、近代の鉄道敷設を契機に出版された名所案内「京都鉄道名勝案内」の扱った名所や文章表現の独自性についても明らかにする。

II. これまでの名所案内に関する研究動向

名所案内記・図会類を扱った研究の多くは、名所観を明らかにすることを目的としているが、その分析方法は、1) 名所案内記・図会類を絵画(画像)資料として研究しているもの、2) 文献資料として研究しているもの、3) GIS等を用いて、空間的な分析をしているものの、の3つに大きく分けることができる。

まず、名所案内記・図会類を絵画資料として研究した長谷川は、「都名所図会」を用いて、

* 立命館大学文学研究科・研修生

キーワード：名所案内記，名所，鉄道，近代，京都

Key words：Guidebooks, Sightseeing Spots, Railways, Modern Era, Kyoto

京都の名所における景観や、参拝者やその場所の住民の行動空間を明らかにしている⁴⁾。そして、吉越は、景観という観点から、鴨川を中心に河川景観の変遷を側面的・立体的に把握している⁵⁾。また、京都以外にも、金子は、江戸の図会類を用いて、江戸住民の行動空間の特徴を明らかにしている⁶⁾。本研究で扱う案内記は、挿絵が絵から写真に移り変わっていき、作り手も版画を刷る者にとどまらず、写真を撮ることができることが可能な者、例えば鉄道会社の社員等へも広がっていくという時期に出版された。

次に、名所案内記・図会類を文献資料として研究しているものとして、山近⁷⁾は、名所案内記の文章内容や章分けの構造について考察し⁸⁾、作品に込められた意図、対象とされる場所への知覚や意味づけを考慮することの重要性を述べている。そして、上杉は、江戸、京、大坂の名所案内記を比較して三都の地域差を分析している⁹⁾。さらに、長谷川は、明治10年代の京都の名所案内記を近世の名所案内記の特徴と比較し、明治前期においても、記載名所の大半が近世の名所案内記と同様に、寺社に関するものであることや、案内記類の分節化により、祭礼、風俗、伝統産業、商業に関する記載がほとんどなくなったことを明らかにした¹⁰⁾。近代になると文章表現が徐々に口語体に移り変わっていく。本研究で対象とする「京都鉄道名勝案内」はまさに、そうした移り変わっていく時期に書かれたものである。

このほか、巡礼に関する論文では、巡礼案内記だけでなく、日記等も資料として用いている。田中は、場所の意味づけ意外に、巡礼路の分析もしている¹¹⁾。愛宕越えについての分析¹²⁾では、巡礼案内記の他に、5点の

巡礼者の記録（道中記など）や道標数の比較など、利用者側の資料も用いており、その点に独自性がある。近年は、巡礼だけでなく、案内記・図会類に関する谷崎の研究でも当時の旅日記が資料として用いられている¹³⁾。

最後に、案内記・図会類研究に対してGISの空間分析を行った研究として、塚本は、今まで、膨大な情報量であるために近世京都の名所案内記は網羅的な分析がほとんどなされてこなかったが、GISを用いることでこれを解決できるとし、近世京都の名所案内記に記載された名所の時期別・掲載数別の変化を空間的に明らかにしただけでなく、近世の名所に流行や人気の変化があることも明らかにした¹⁴⁾。こうした方法は近代以降の研究にも有効であるだろう。案内記・図会類、ガイドブックを、GIS等で空間的分析をすることにより、それまでの研究では見えてこなかった、記載名所の空間的な経年変化を捉えたり、情報の比較検討を行うことも容易になると考えられる。

そこで、本研究では、GISも活用しながら、「京都鉄道名勝案内」¹⁵⁾や、京都において鉄道敷設の前後に刊行された名所案内記・図会類について鉄道敷設による影響を明らかにする。

III. 研究方法

本研究では、「京都鉄道名勝案内」(1903(明治36)年)を中心に、明治中期以降に書かれた京都名所案内・図会類である、『京都名所案内図会』(1881(明治14)年)、『新撰京都名所図会』(1893(明治26)年)、『京都名所案内』(1899(明治32)年)、『京都名勝案内』(1913(大正2)年)、『京都名所案内』(1917(大正6)年)を用いる¹⁶⁾(第1表)。なお、鉄

第1表 比較した資料の情報

タイトル	刊行年	著者・編者	記載地域
京都名所案内図会	1881（明治14）年	遠藤茂平編	京都
新撰京都名所図会	1893（明治26）年	小林元之介編	京都
京都名所案内	1899（明治32）年	片岡賢一編	京都
阪鶴鉄道名所案内	1902（明治35）年	可見令一著	鉄道沿線（大阪、兵庫）
京都鉄道名勝案内	1903（明治36）年	大江理三郎著	鉄道沿線（京都）
京阪電気鉄道線路案内	1910（明治43）年	山本松三郎編	鉄道沿線（大阪、京都）
京阪電鉄沿線遊覧案内	1912（明治45）年	筏六郎編	鉄道沿線（大阪、京都）
京都名勝案内	1913（大正2）年	黒田天外・塩見観潤著	京都
京都名所案内	1917（大正6）年	大槻ささ舟編	京都

注）「阪鶴鉄道名所案内」、「京阪電気鉄道線路案内」、「京阪電鉄沿線遊覧案内」は、京都以外（大阪、兵庫）の名所も多く含むため、空間上の比較は行わない。

道会社の名所案内に着目すると、「京都鉄道名勝案内」と同時期に出版されたものは他にもある。「阪鶴鉄道名所案内」（1902（明治35）年）、「奈良鉄道名勝案内」（1903（明治36）年）、「京阪電気鉄道線路案内」（1910（明治43）年）、「京阪電鉄沿線遊覧案内」（1912（明治45）年）など¹⁷⁾があげられる。しかし、今回これら4つについては、京都以外（大阪、兵庫）の範囲に広がるため、空間上の比較は行わない。

研究対象地域は、京都府内に存在した名所の変化を分析するため、明治中期以降の京都名所案内・図会類に記載された名所の範囲とする。第1図は、「京都鉄道名勝案内」（1903（明治36）年）の名所が記載された地域を地図化したものである。三角が「京都鉄道名勝案内」1903（明治36）年の記載名所を表し、丸がそれ以外の案内・図会類の記載名所を示している。ここからは、「京都鉄道名勝案内」の記載名所が他の案内・図会類に比べ分布が沿線部のみに限られていることがはっきりと分かる。

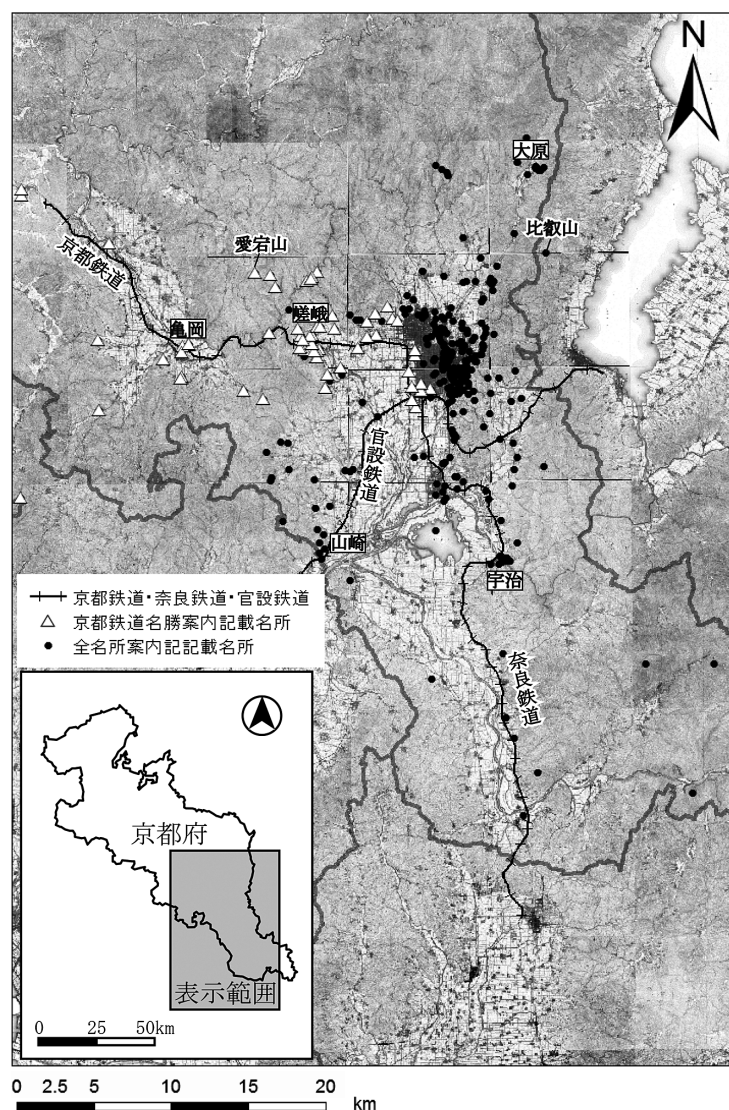
それぞれの名所案内に記載された名所を内容ごとに分類し、名所案内が扱う名所にどの

ような違いがあるか示した上で、GISを用いて空間的な分布の特徴を比較する。さらに、名所案内に記載された新名所を当時の京都日出新聞の記事や広告等で詳しく調べていく。

IV. 鉄道が名所案内記に与えた影響

本研究では名所図会・案内の記載名所を従来の研究¹⁸⁾をもとに、①寺社、②近世以前の建造物・旧跡、③自然・景観・眺望、④地名、⑤近代以降の建造物、⑥イベント・行楽、⑦店舗に分類した。まず、すべての名所図会・案内の記載名所の分布からは、長谷川の明治前期の京都を扱った研究¹⁹⁾で明らかにされている、明治前期においても、近世の名所案内記同様に、大半が寺社に関するものであったことと同様、明治中期以降も数で言えば、寺社が多いことが分かった。全ての分類の中でも寺社の分布は最も広範にわたった。自然・景観・眺望に分類される名所は山地、水域部に分布している。

より注目すべき点は、近代以降の建造物である。近代以降の建造物は、おおむね市街地にあるが、近代以降の建造物でそれ以外の場

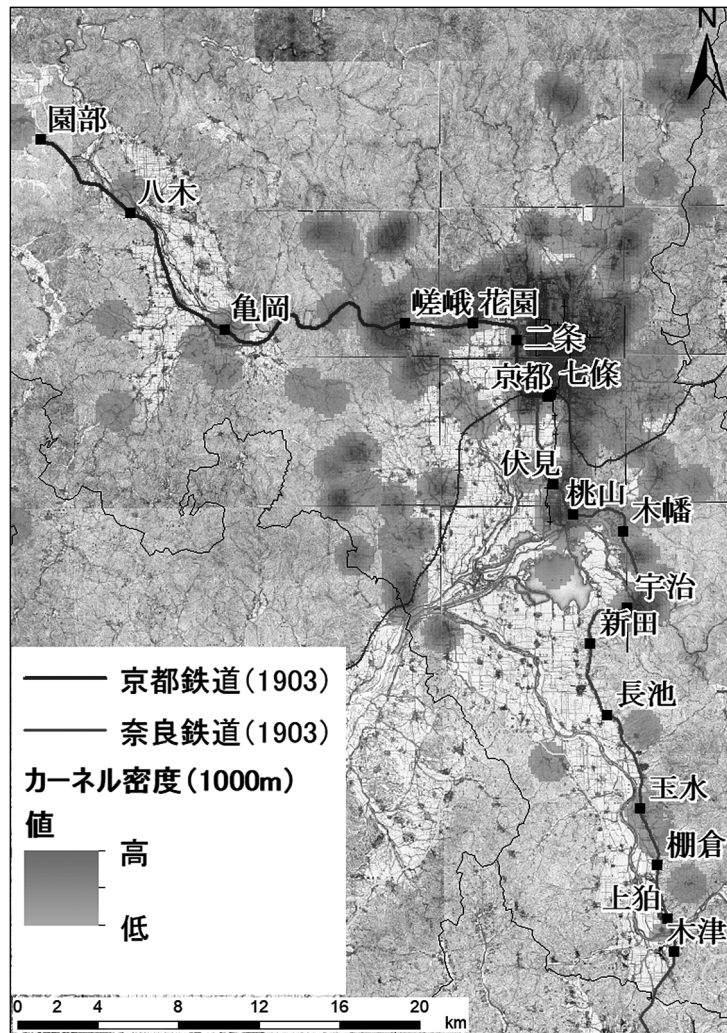


第1図 名所案内記に記載された名所の分布・範囲

注) 基図として1892～1909(明治25～42)年測図2万分の1正式図を使用。

所に立地するものは、桂川の鉄橋や、桂川や宇治川の川沿いに見られる水力を利用した製鉄所や製紙場である。馬木²⁰⁾は、近世から近代東京の名所案内記を都市風景という視点で読み解く中で、近代特有の洋風建築や橋梁に対する見かたが、挿絵や写真に建物単体で扱われていることから、近世以前の寺社建築

物を鑑賞するときの見かたである、「美麗」、「壮麗」に共通すると述べている。加えて、近代以降の建造物であれば、たとえ市街地になくとも名所として取り上げられている。直接その場所に行かなくても、遠くから見えたことも、取り上げられた一因と考えられる。「京都鉄道名勝案内」の長刀坂の紹介においては、



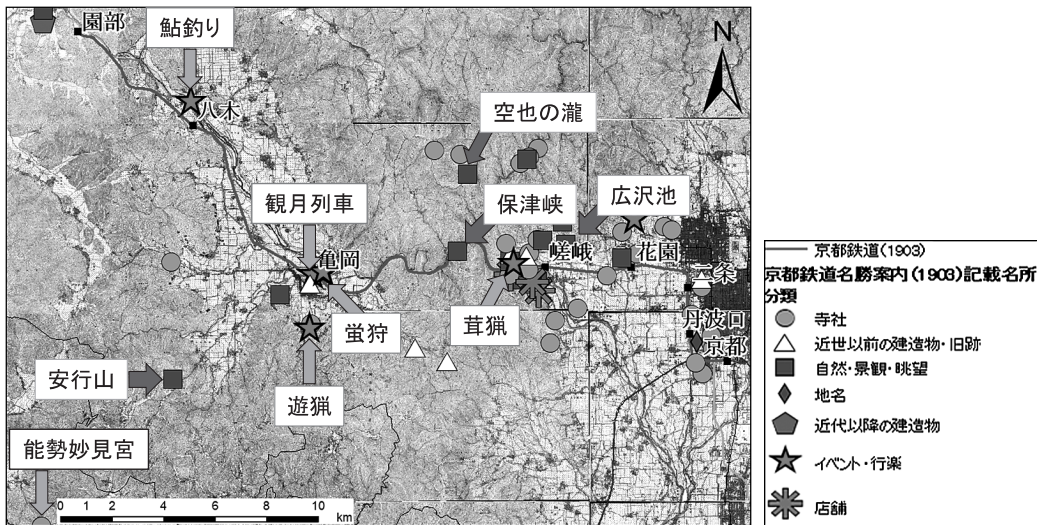
第2図 全名所図会・案内記載名所の掲載頻度と集中地域

注) 基図として1892～1909(明治25～42)年測図2万分の1正式図を使用。

坂から桂川の鉄橋や、製紙場の煙突から黒い煙が出ている様子が見えると書かれている。近代以降の建造物がそれだけ当時において、注目されやすく、物珍しかったといえる。

次にすべての名所図会・案内の記載名所の掲載頻度と集中地域をカーネル密度によって表した(第2図)。名所が集中して掲載されている地域がどこかということだけでなく、

多くの名所図会・案内記に記載されている名所がどの地域に見られるかを明らかにするためである。検索範囲は1000mで、掲載回数を考慮したものである。よって密度だけでなく、掲載回数によっても濃さが変化するように表現した。ここからは、京都市街地と、嵯峨、伏見、宇治を結ぶかぎ型の地域に、名所図会・案内記作成者の指向性が表れているこ



第3図 京都鉄道名勝案内の記載名所

注) 基図として1892～1909(明治25～42)年測図2万分の1正式図を使用。

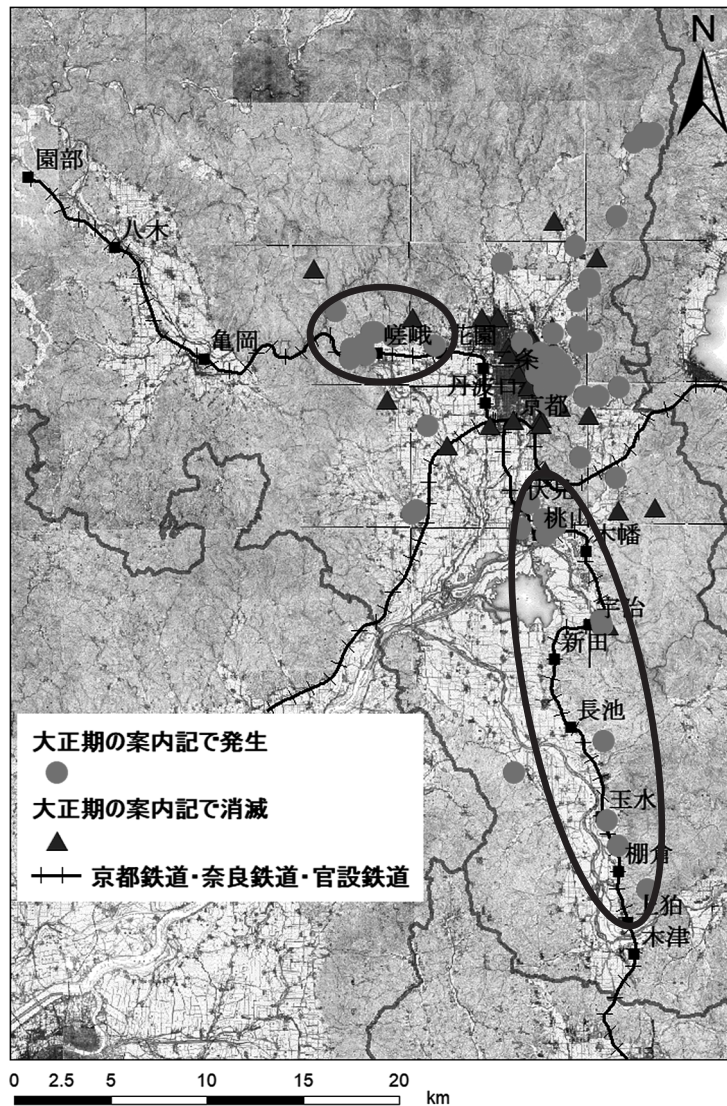
とが分かる。この指向性は京都鉄道・奈良鉄道の沿線とも一致している。また、宇治や大原などの街道沿いにあたる地域にも指向性が表れている。鉄道沿線、街道沿い等、交通の発達した地域に名所が多く分布する一方、比叡山、愛宕山、三尾等、信仰の山も、記載名所数が限られているものの、掲載回数は多く、重視されていたことが分かる。

「京都鉄道名勝案内」の記載名所に限って見ると(第3図)、ほぼ全ての名所が沿線に分布しているが、大阪の能勢妙見宮は例外である。この理由は、案内によると、亀岡駅で降りて行く人がいたかららしく、「之は附近の名所としては掛け離れてをりますけれども亀岡駅に下車して参詣になる方が随分少なからぬ数で御座いますから…」(「京都鉄道名勝案内」より)と記されており、信仰する人が多く、京都側からは京都鉄道が利用されていたと分かる。地域別に見ると、花園以西は、自然を楽しむイベント・行楽が多く見られる。

特に嵯峨以西は、自然・景観・眺望が多く目立つ。これは「京都鉄道名勝案内」の記載名所の特徴であるため、次章で言及する。

京都鉄道、奈良鉄道敷設後に発生もしくは消滅した名所を表した(第4図)。「京都鉄道名勝案内」を除き、その前後の名所案内を比較対象にしている。京都鉄道、奈良鉄道敷設後の名所案内で発生した名所は、京都鉄道、奈良鉄道沿線に多く見られる。ちなみに消滅した名所は、全部で37点あるが、そのうち16.2%(6点)は近代以降に出来た京都駅・療病院、ならびに桂川の鉄橋などの施設である。近代以降に出来た施設は、出来た時期には多く取り上げられるものの、流行り廃りによって名所として記載されなくなる可能性が高かったと言える。

以上の空間分析から、京都鉄道の敷設により、花園以西における沿線の名所が、記載されることが多くなったことが分かる。同時期に敷設された、奈良鉄道沿線でも同様なこと



第4図 京都鉄道、奈良鉄道敷設後に発生もしくは消滅した名所
注) 基図として1892～1909(明治25～42)年測図2万分の1正式図を使用。

が言える。近代以降に発生した名所が、京都鉄道、奈良鉄道敷設後に京都鉄道、奈良鉄道沿線に高い割合で見られることも分かった。さらに、鉄道敷設間もない時期に、既に鉄道会社が案内を出しており、鉄道会社の社員などが新たな名所を記載するまでになっていたことも明らかになった。

V. 「京都鉄道名勝案内」の独自性

本章では第2の目的に対する結果を述べていく。文章表現と、名所の性格の両面から「京都鉄道名勝案内」の独自性を明らかにする。

まずは、「京都鉄道名勝案内」の著者とその表現方法について紹介する。「京都鉄道名

勝案内」の著者は大江素天（理三郎）であり、朝日新聞社編、『勤続者表彰式記録』（1933（昭和8）年）^{21）}に収録された、大江自身が書いた「二十五年前の青年記者」によれば、「……算盤を握つて金勘定に浮身をやつし、時にはトランシットを覗いて測量をやっていたK鉄道會社の一書記が、……」とあることから、京都鉄道の書記であったことが分かる。「京都鉄道名勝案内」は鉄道会社内の者によって書かれたものであり、この記録には、1908（明治41）年に朝日新聞社に入社するまでの間に、小説で朝日新聞の選外佳作をしばしばとっていたことが書かれているので、彼が文学に対して関心を持ち、文才にも恵まれていたことを示している。

また、緒言や内容全てに名前が出てくる櫻井花子であるが、櫻井について、著者の言葉に、「假装の佳人を爰に聘して、可憐なる嬌音に、深勝遊士の忠實なるガイドたらしむ」とあるところや、京都鉄道會社取締役兼支配人件直之助より著者大江理三郎（素天）への来書（来状）があり、櫻井花子となっていないことから、大江は櫻井花子という架空の人物に仮託して書いたといえる。著者の言葉を読み解くと、これまでの名所案内は叙事的で変化がなく似たようなものばかりであった。しかし奇抜な語句や、文の装飾に凝ってしまうとかえって興味がわかず、誇大で誤解さえ招いてしまう。それを避けるために、彼はこれまでの名所案内には見られなかった、女性の語り口で書いたということが分かる。

では、文章を含め、京都鉄道名勝案内の特徴を前後の名所案内と比較し、明らかにしていく。文章表現の比較には、多くの名所案内に共通して記載されている金閣寺の紹介文で比較する方法をとる。前後の案内記・図会類

と比較すると、句読点が用いられている案内記は、「京都鉄道名勝案内」（1903）と、「京都名所案内」（1917）の2点のみである。また、「京都鉄道名勝案内」は、それ以外の名所案内に比べ、口語体ではないが、語りかけるような表現を試みていて、そこに「京都鉄道名勝案内」の独自性が読み取れる。この点は大江自身も述べており、それまでの名所案内に対する挑戦である。

次に、名所の記載分類の比較を行っていくことで、「京都鉄道名勝案内」など鉄道関係の名所案内と、比較対象となる前後の名所案内が、いかに異なる性格を有していたのかを、明らかにしていく。「阪鶴鉄道名所案内」、「京阪電気鉄道線路案内」、「京阪電気鉄道遊覧案内」など、鉄道会社の名所案内を除く、「京都鉄道名勝案内」の前後に書かれた名所案内は寺社の割合が70～86%に達しているが、鉄道会社の名所案内は、寺社の割合が低く、特に「京都鉄道名勝案内」、「京阪電気鉄道線路案内」では50%を下回っている。また、「京都鉄道名勝案内」、「阪鶴鉄道名所案内」は自然・景観の割合が20%を超えている。これは、京都鉄道の沿線が山間部を多く含むことによる。

「京都鉄道名勝案内」の特色は、寺社の記載された割合だけではない。他の名所案内と比較してイベント・行楽や店舗の割合が高く、特にイベント・行楽の割合は、他と比較して高い。具体的な内容は、茶屋、旅館、松茸狩りや、川下り、筏の見物、遊猟、鮎釣り、そして、観月列車などである。「京都鉄道名勝案内」は観月列車を紹介し、宣伝している。また、観月列車について、1901（明治34）年8月23、24日の京都日出新聞に、広告^{22）}が出ている。同日に、石崎酒店が京都観月列車の乗客向けに、清酒やビールを大安売りす

るという広告²³⁾を載せている。今まで京都に存在しなかった名所であり、当時新しかった鉄道交通を観光に生かそうという試みの1つである。他の名所案内に記載されているイベント・行楽は、京都博覧会や、京都の三大祭であり、京阪電鉄の名所案内でも、茶摘みや、くらわんか舟、桂川の網船の見物などが挙げられている。これらと比較すると、「京都鉄道名勝案内」に書かれている名所は、他の名所案内記に比べ、イベント・行楽の割合が高いというだけでなく、鉄道会社そのものが起こしたイベントという点で、独自性がある。

「京都鉄道名勝案内」に記載された、独自性が表れているイベント・行楽や店舗であるが、嵯峨駅周辺より以西で多く見られる。また、この地域の写真が複数掲載されているが、これは、著者である大江理三郎自身が出向いて撮影したものである。著者大江の思い入れが、反映されていると考えられる。1905（明治38）年に大江の書いた小説『長恨』²⁴⁾が出版されている。ここから「京都鉄道名勝案内」の著者、大江のこの地域に対する思い入れを明らかにする。この小説は、女学校の先生と教え子の恋愛を書いた小説である。その中に、2人が京都鉄道に乗って、川下りを楽しみ、嵯峨嵐山を歩き回る場面も出てくる。さらには、二條駅（現、二条駅）で乗車し、亀岡駅で降車するまでの車窓までも詳しく書いている。この場面では名所や、景色も詳しく書かれており、「京都鉄道名勝案内」に記載されている名所も13点存在する。「京都鉄道名勝案内」に記載されていない名所で、かつ川下りの途中の見どころとなっている場所は30点存在する。そのうち、川下りの途中の見どころは22点である。大江が小説の中で、特にこの地域を選び、車窓を含む移動途

中の景色、名所を含めて、詳細に書いているところから、小説にこの地域の名所、景観を読者に紹介する意図も含ませたと考えられる。この思い入れが、「京都鉄道名勝案内」に反映され、嵯峨以西の名所が、寺社だけに留まらない、独自のイベント・行楽を多く含む結果に繋がったと考えられる。

大江がこの地域に思い入れを持った理由は、彼の生まれ育った場所に関係していると考えられる。1916（大正5）年に刊行された、『現代多紀郡人物史』²⁵⁾に、大江が紹介されている。ここに、大江が、多紀郡の大芋村^{おぐも}で生まれ、幼少期をすごしたことが書かれている。多紀郡は現在の篠山市の位置にあって、大芋村は、園部から西に20 km 程の場所に位置する。大江にとって、嵯峨以西の地域は身近な地域であったことが分かる。

最後に、京都鉄道の利用状況を紹介する。京都鉄道を利用する旅客は日露戦争による不況の影響により一時は減少したものの、1906（明治39）年に回復しつつあったが、その後、京都鉄道は国有化された。

VI. おわりに

鉄道敷設後に、京都鉄道、奈良鉄道沿線といった鉄道沿線の名所が、名所案内記に多く取り上げられるようになった。京都鉄道の敷設により、花園以西における沿線の名所も、記載されることが多くなった。同時期に敷設された、奈良鉄道沿線でも同様なことが言える。京都鉄道、奈良鉄道敷設後に発生した名所も、名所全体で、京都鉄道、奈良鉄道沿線に多く見られることが分かった。さらに、鉄道敷設間もない時期に、既に鉄道会社が案内を出しており、新たな場所を掲載するまでに

なっていたことから、近代京都において、鉄道という新しい交通手段が名所案内記に与えた影響は大きかったと言える。対して、明治10年代から30年代の名所案内記・図会類に掲載されていたが、大正に入り掲載されなくなった名所は、近代以降に出来た施設が、創設時期には多く取り上げられるが、時とともに名所として見られなくなる傾向にあることを示している。

「京都鉄道名勝案内」に関しては、寺社の掲載割合が低だけでなく、嵯峨以西で、茶屋、旅館、松茸狩りや、川下り、鮎釣り、観月列車といった、イベント・行楽や店舗が少なからず取り上げられている点に独自性が見られる。このことは、著者が同時期に書いた小説「長恨」からも読み取れるように、著者の思い入れが反映されたと考えられる。文章表現にしても、「京都鉄道名勝案内」は、それ以外の名所案内に比べ、口語体ではないが、女性が語りかけるような表現を試みていて、そこに「京都鉄道名勝案内」の独自性が読み取れる。また、観月列車は、新しかった鉄道交通そのものを観光に生かそうという当時の試みの1つである。

本研究は、従来の京都における名所案内記・図会類研究に加え、鉄道敷設による影響の空間的な分析を行い、新たに「京都鉄道名勝案内」を事例に京都の鉄道案内を紹介した。このことにより、近代京都において鉄道敷設の影響は大きく、単に名所案内に掲載されている名所の分布を変化させただけでなく、新たな観光事業を生み出す契機となっていたことも明らかとなった。

〔付記〕本稿は2016年度に立命館大学人文
学科地域研究学域地理学専攻に提出した卒業

論文に加筆・修正したものである。作成にあたっては、矢野桂司先生をはじめとする立命館大学地理学教室の先生方にご指導をいただきました。心よりお礼申し上げます。

注

- 1) 山本光正 (2010)「旅行案内書の成立と展開」、国立歴史民俗博物館研究報告、155、109-135。
- 2) ①荒山正彦 (2014)『シリーズ明治・大正の旅行 第5巻』、ゆまに書房、10-24頁。②荒山正彦 (2018)『近代日本の旅行案内書図録』、創元社。
- 3) 東海道線といった広範囲を扱った鉄道沿線案内は明治20年代から京都を既に紹介している。
- 4) 長谷川奨悟 (2010)『『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象』、人文地理、62(4)、60-77。
- 5) 吉越昭久 (1993)「名所図会類にみる河川景観—近世の京都、鴨川を中心に—」、奈良大学紀要、21、145-156。
- 6) 金子晃之 (1995)「近世後期における江戸行楽地の地域的特色—『江戸名所図会』からみた行動文化—」、歴史地理学、37(5)、20-43。
- 7) 山近博義 (1999)「近世名所案内記類の特性に関する覚書—『京都もの』を中心に—」、地理学報、34、95-106。
- 8) 山近博義 (2005)『『都名所図会』の構成と本文にみられる諸特徴』、地理学報、36、19-34。
- 9) 上杉和央 (2004)「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」、地理学評論、77(9)、589-608。
- 10) 長谷川奨悟 (2012)「明治前期の名所案内記にみる京名所についての考察」、歴史地理学、54(4)、24-45。
- 11) 田中智彦 (1984)「秩父阿熊通りについて」、埼玉地理、8、36-39。
- 12) 田中智彦 (1987)「愛宕越えと東国の巡礼者—西国巡礼路の復元—」、人文地理、39(6)、66-77。
- 13) 谷崎友紀 (2014)「近世京都における旅人の観光行動—旅日記と小型案内記との比較をととして—」、立命館地理学、26、47-58。
- 14) 塚本章宏 (2006)「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史の変遷」、GIS-理論と応用、14、41-52。
- 15) 大江理三郎 (1903)『京都鉄道名勝案内』、京都鉄道名勝案内発行所。
- 16) ①遠藤茂平編(1881)『京都名所案内図会 乾・坤』、正宝堂。②小林元之介編 (1893)『新撰京都名所図絵』、寺田熊次郎。③片岡賢三編(1899)『京都名所案内』、風月堂。④黒田天外・塩見観

- 潤（1913）『京都名勝案内』、前田正栄堂。⑤大槻ささ舟編（1917）『京都名所案内』、清文堂。
- 17) ①可児令一（1902）『阪鶴鉄道名所案内』、阪鶴鉄道。②大島兵五郎（1903）『奈良鉄道名勝案内』、駸々堂。③山本松三郎編（1910）『京阪電気鉄道線路案内』、京阪電気鉄道。④筏六郎編（1912）『京阪電鉄沿線遊覧案内』、咬菜社。
- 18) 前掲 10)、14)。
- 19) 前掲 10)
- 20) 馬木知子（2004）「名所本にみる近代東京の都市風景の変容について」、ランドスケープ研究、67(5)、623-628。
- 21) 朝日新聞社編（1933）『勤続者表彰式記録』、朝日新聞社、79-88 頁。
- 22) 京都日出新聞「納涼観月 京鉄列車」、京都日出新聞社、1901 年 8 月 23 日、京都日出新聞「納涼観月 京鉄列車」、京都日出新聞社、1901 年 8 月 24 日。
- 23) 京都日出新聞「京鉄観月列車と米喜澤之鶴瓶詰」、京都日出新聞社、1901 年 8 月 23 日。
- 24) 大江素天（1905）『長恨』、駸々堂、1-306 頁。
- 25) 田中宗孝編（1916）『現代多紀郡人物史』、三丹新報社、166-167 頁。